

A：岩手コース

村上暢子（1987・法）

被災地へ訪問するのは初めてでした。こういう機会でもなければ行く勇氣はなかったかもしれません。バスを降りて基礎だけ残った何もない風景。がれきの山。折れ曲がったままの電柱。時間が止まったかのように錯覚するほどでした。

岩手校友会の方々との交流では元気なお姿を見て勇氣づけられたと共に復興のリーダーとして頑張っておられる姿はまさに立命魂。さすが立ちゃんです。立命魂ここに有り。立命館という強い絆。それは何も言わなくても心と心が通じ合える不思議な縁です。

校歌「赤き血潮、胸に満ちて・・・」を歌うと学生時代に戻ると共に、上を向いて強く頑張っていこうという力がみなぎってきます。

今回の応援事業という機会がなければこういう思いもなく東北へ行くこともなかったかもしれません。立命館という学校を柱として全国の校友が繋がった瞬間でもありました。

参加して良かったということと校友会事業のおかげで被災者だけでなく私たち自身も生きるということの意義を探るという深い二日間になりました。